

現代アフリカの政治と民主化 —●小 田 英 郎

(慶應義塾大学法学部教授)

昨年から今年にかけてアフリカの政治変動は、近年になく激しい。長いあいだ南アフリカ共和国の不法統治のもとに置かれていた「アフリカ最後の植民地」ナミビアが、昨年11月の制憲議会選挙の結果、本年3月について独立を達成したこと、本年2月のANC（アフリカ民族会議）、PAC（パンアフリカニスト会議）、共産党などの非合法措置の解除とネルソン・マンデラの釈放、5月に行われた少数白人政府とANCの予備交渉その他に象徴される南アフリカ共和国での、アパルトヘイト廃絶に向けたデ・クラーク政権の迅速な動きなどは、そうした大きな政治変動を象徴するものである。また西サハラ、チャド、「アフリカの角」など紛争地域における和平ムードの一層の高まりも、注目される。

しかし、大陸的な規模で進行しつつある最大の政治変動といえば、それは「民主化・自由化への動き」であろう。こうした民主化・自由化への動きは、一党制から複数政党制への転換というかたちをとって現れることが多い。ここ2年の時期について言えば、昨年2月の憲法改正によってFLN（民族解放戦線）の一党制から複数政党制へ移行したアルジェリアを皮切りに、ガボン、コンゴ、コートジボワール、ザイール、ザンビア、ソマリア、ニジェール、ベニンといった諸国で、一党制の廃止ないしは複数政党による選挙の実施が公式に声明されている。またケニアのように大規模な民主化デモが続いている国もある。

本年7月のOAU第26回首脳会議でもこの民主化・自由化の問題が取り上げられ、民主化促進を強調する宣言が採択された。ひところ30近い国が一党制を採用し、また軍事政権を含めて、「開発独裁」とも呼ばれる強権的政治体制が圧倒的多数を占めていたアフリカにも、大きな変化の風が吹き始めた。ソ連・東欧における民主化の嵐に触発されたこの政治変動は、アフリカの新たな旋回軸となっている。しっかりと見守るべきであろう。